

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	〈いじめ〉体験における当事者意識と当事者性：重松清「エビスくん」論
Author(s)	秦, 光平
Citation	国文学攷, 251 : 35 - 48
Issue Date	2021-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052812
Right	Copyright (c) 2021 by Author
Relation	



〈いじめ〉体験における当事者意識と当事者性

——重松清「エビスくん」論——

秦 光 平

はじめに

日本において、一九八六年に起きた「中野富士見中学いじめ自殺事件」（俗に「葬式ごっこ」と呼ばれる）を契機に〈いじめ〉が社会問題化した。それ以降、〈いじめ〉は数多の文学作品の中に描かれてきたが、その〈いじめ〉表象史の本格的な研究は未だ十分に為されていない。これまでに蓄積されてきた議論を参照しつつ、文学が〈いじめ〉問題といかに関係してきたのかを検討する作業は、日本の現代文学史を考える上でも急務であろう。そのためには、〈いじめ〉表象を实践した作品群への読解を積み重ねていく必要がある。本稿では、その一環として重松清による中編小説「エビスくん」（一九七七年）を取り上げ分析していく。

教育社会学の領域にて継続的に取り組まれている〈いじめ〉の言説研究によれば、〈いじめ〉とは社会問題化により発見された構

築的な概念である。この認識枠組みにより、それまで単に「いやがらせ」「からかい」等と称され軽んじられてきた問題行動群が時に人を死に追いやるほどの暴力であると捉え直されたのである。〈いじめ〉概念の成立により不可視の暴力を問題化することができるようになった恩恵ははかりしれないが、そのように名づけられることで生じた副作用の存在も指摘されている。〈いじめ〉問題はたびたび、とくに子供の自殺が大々的に報道される際にはセンセーショナルに語られがちであるが、その語りにおいてはしばしば「被害者／加害者」の関係性があまりにも自明のものとして定位され、〈いじめ〉と名指される現象の複雑性が捨象されてしまうのである。〈いじめ〉表象を实践した文学作品への読解を通し特徴的な〈いじめ〉の語られ方の存在を明らかにすることにより、固定化したまま社会に流通する〈いじめ言説〉を相対化・複雑化することができると期待する。

重松清（一九六三—）は、一九九一年に長編小説『ピフォア・

ラン」を上梓して以降、現在に至るまで旺盛な活動を続けている作家である。家族の問題や少年少女期の問題を継続的にテーマとして取り上げているほか、光村図書平成一七年度版小学校六年生用国語科教科書に短編小説「カレライリス」を書き下ろすなど、実際の教育言説に対する関与・発言も多い。中でも、社会問題としての「へいじめ」を直接的に取り上げた作品群にはこうした重松の資質がとくに鋭く表れていると言えるだろう。本稿にて取り上げる「エビスくん」は、一九九七年一月に著者の作品集『ナイフ』（新潮社）の一編として発表された。²『ナイフ』は作品集全体で学校における「へいじめ」を扱っており、ベストセラー小説として広く読まれているが、「エビスくん」や『ナイフ』を中心的に論じた研究は未だ発表されていない。³重松清の代表作として、「へいじめ」を表象した文学作品として、真っ先に論じられるべき作品のひとつであることは間違いない。

本作は、語り手「ぼく」が過去の「へいじめ」体験を数十年後に回想として独白する一人称小説であるが、本稿にて着目したいのは、「ぼく」の語りに見出されるひとつの「歪み」である。次節以降、その歪みとは何かを具体的に指摘した上で、その内実を「当事者意識」「当事者性」、そして「男性性」の概念を鍵に読解していく。そのことを通じ、重松清という重要な作家による特徴的な「へいじめ」表象として、本作の分析評価を行なっていきたい。

1. 「ぼく」の主観

「エビスくん」の梗概は以下の通りである。

一九七四年。難病を抱える妹（ゆうこ）をもつ小学六年生の「ぼく」（ひろし）のクラスに転校生の「エビスくん」がやって来る。「エビス」という神さまがいることを知った「ぼく」は妹に「神さまのエビスくんをお見舞いに連れて来てあげる」と約束する。「ぼく」はエビスくんと仲良くなろうとするが、反対にエビスくんからいじめられるようになってしまう。しかし、エビスくんは「ぼく」のことをなぜか「親友」と呼び、「ぼく」自身もまたエビスく人を嫌いになることはできない。

その中で妹の容態が急変する。その頃には、クラスの男子全員から「ぼく」は口をきいてもらえなくなっていた。ある朝、クラスの女子たちと口論になり学校を飛び出してしまった「ぼく」は、道中で偶然、登校途中のエビスくんに会う。喧嘩のあと、妹のお見舞いに来てほしいと頼むと、エビスくんは承諾し、その足で病院に行く。エビスくんは眠っている妹に励ましの言葉を贈り、「ぼく」とエビスくんはやはり親友なのだを確認し合うが、そこではじめてエビスくんの転校を知らされる。学校に戻り同級生たちとも和解するが、そのままエビスくんは姿を消し、もう一度会うことのないまま転校してしまふ。

それから二〇年後、「ぼく」は三十路路になった当時の同級生たちと同窓会で再会する。次の日には難病だった妹の結婚式も控えている。しかし、そこにエビスくんの姿はない。「ぼく」たちは当時のこと、エビスくんのことを懐かしく回想する。

以上の梗概に示した通り、本作は、〈へいじめ〉の被害経験を有する「ぼく」が、時には現在からの視点も織り込みつつ、基本的には当時の心情に寄り添いながら小学生時代の交友関係を語り直していく物語とまとめられる。本節では、そうした一人称語りの内に生成されていく「ぼく」の主観をどのように捉えるべきであるのか検討していきたい。

「ぼく」とエビスくんは、〈へいじめ〉の被害者／加害者でありながら親友と認め合っている。その関係性は「ぼく」自身へぼくたちは親友になった。まわりは誰ひとりとして認めず、当のぼくだって、どろが親友やねん、と言いたくなる、そんな奇妙な付き合いがはじまったのだ（二二〇頁）と回顧しているように、当時から現在に至るまで自他ともに奇妙なものと思われていた。へいまでも不思議でならないのだが、ぼくはどんなにいじめられてもエビスくんを恨まなかった。いじめられるのは、もちろん嫌だった。（中略）それでもエビスくんを恨んだり憎んだりほしくない。我慢してそうだったのではなく、最初から恨みや憎しみが湧いてこないのだ（二三四頁）といった回想からは、〈へいじめ〉体験そのものから受けた傷と、

その加害者たるエビスくんへの感情とが「ぼく」自身の中でもうま〜く釣り合っていないことを見て取れよう。こうした「ぼく」の不安定な心情をどのように理解すべきであろうか。

文芸評論家の伊藤氏貴は、精神医療の語彙を借り「ストックホルム症候群」の一種と解釈している⁴。ストックホルム症候群とはヘテロリストや誘拐犯などに無理やり拘束された人質などが、いつの間にか自分を苦しめる加害者に同調して協力する⁵。心理現象のことであるが、被害者が加害者に精神的な癒着をしているかのような関係性を見るならば、「ぼく」の心情へこの診断名によって歩み寄るのも有効であろう。実際、精神科医の香山リカによる次のような解説からも、ストックホルム症候群への議論が〈へいじめ〉問題にとっても重要であることは間違いない。

いじめや差別の被害者やまわりで見ている人の中にも、あまりにひどい目にあっていたりそれを見たりしているうちに、いつのまにか「向うの人たちは本当はいい人かもしれない」などと自分に言い聞かせ、さらにはそちらの仲間になったり別の人にいじめをしたり差別したりすることもあるのです。それは決して、相手の主張に共感したからなどではなくて、それほどひどい目にあったりそれを見たりしたための、一時的な心の反応です。「あれ、向こうもそれほど悪い人ではないのでは」と思い始めたら、「いや、そんなはずはない」と自分に言い聞かせ

る必要があります。⁶⁾

着目したいのは、香山がストックホルム症候群を（一時的な心の反応）と断言し、加害者への同調を感じた場合にはそれを相対化するよう注意を促している点である。精神医療や心理学の領域において、ストックホルム症候群とは極端に恐怖・緊張を強いられる状況に置かれた際にあくまでも自己防衛のため一時的に生起する感情と捉えられる。そして、そのように倒錯した心理を一旦、相対化した上で、本人の置かれた環境の側の異常性こそを問うていくよう主張されるのだ。

この点に関連して、〈いじめ〉研究においても、主観／客観の峻別を行なうことの困難が早期から指摘されている。教育社会学者の滝充は次のように述べ、〈いじめ〉の発生要因を調査するにあたり〈いじめ〉行為を主観的かつ客観的に把握する⁷⁾ことの困難と重要性を提起している。

前者（註…事態を客観的に捉えるため、〈いじめ〉の尺度を限定する調査方法）では尺度が共通化できる反面、調査者によって「いじめ」と見なされた以外の行為を把握できず、また行為の形態のみが重視されて当事者の思いが抜け落ちやすい。一方、後者（註…具体的な行為を限定せず、被害者が〈いじめ〉と感じたかどうかを尺度とする調査方法）では被害調査の主観性は尊重される反面、「いじめ」行為に対するイメージが共有され

ていないと、被害者は「いじめ」と主張するのに、同じ事件の加害者は「ふざけ」と主張するといったズレが生じる。⁸⁾

滝が示しているのは、当事者自身が〈いじめ〉をどのように体験したと考えているのか、ということと、実際に当事者が〈いじめ〉にどのように関与していたと考えられるのか、ということが必ずしも一致しないために生じる〈いじめ〉把握の困難である。また、引用の傍線部のような場合のほか、被害者自身によって〈いじめ〉の被害経験が否認されてしまう事例もある。〈いじめ〉において当事者の被害感覚が重要であることは疑うべくもないが、その主観が構築された過程に関しては、本人を取り巻く環境要因・社会要因を考慮に入れつつ相対化を施していく必要があるのだ。

したがって本稿でも、「ぼく」の語る〈いじめ〉体験について、「ぼく」自身が〈いじめ〉をいかに体験したと考えているのか、ということと、「ぼく」の体験にどのような特徴があったと考えられるのか、ということとを、それぞれ「当事者意識」「当事者性」と呼び分けることにより検討していく。そうすることで、先に見たような「ぼく」の一見、奇妙な心情が種々の関係性の中でいかに構築されることとなったのかを明らかにしていきたい。

そのために、まずは次節にて、「ぼく」の主観を相対化する必要性が「ぼく」の語り自体から読み取れることを示しておきたい。その最たるものは、「ぼく」が〈いじめ〉に対する当事者意識を吐露

する場面に表れている。

二・語りの歪み

小学生当時の同級生が一堂に会した席にて「いじめ」の報道が話題に上った際、「ぼく」は次のような意見を示している。

「最近、新聞やらテレビやらで、いじめのニュースがあるやろ。あれ見るたんびに、わい、エビスとおまえのこと思い出すねん。なんて言うんやろな、元祖・いじめ、いうか……昔のいじめはのどかなもんやったのう、いうか……こっつ懐かしなんねん」

じつを言えば、ぼくもそうだ。いじめられるのをわかっていながら、いじめられっ子がなぜかいじめグループのそばにいた、そんな話を聞くと、痛みともくすぐったさともつかないものが胸の奥をよぎる。弱い男の子は強い男の子が好きなんや、それぐらいわからんのかアホ、評論家やワイドショーのレポーターに毒づくこともある。(二二八六頁)

同級生が当時の「いじめ」を「のどか」であったと語り、「ぼく」もそれに同意している。更に、「ぼく」が「いじめ」報道に対し「弱い男の子は強い男の子が好きなんや」という見解を抱いていることも示されている。自身の「いじめ」体験に発する当事者意識が強く表れた箇所と考えられるが、この見解を「ぼく」による「いじめ」報道への発言と捉えるならば、ひとつの大きな問題があることを指

摘しなくてはならない。それは、かつての「いじめ」被害者が自身の体験を過剰に一般化して語ることにより、意に反して、その発言が現実の「いじめ」被害者への抑圧となってしまう問題である。

「ぼく」は確かに「弱い男の子は強い男の子が好き」という認識のもとエビスくんに好意を抱き、親友と認め合うことができた。しかし、そのような「ぼく」の体験は個別的なものであり、一般化できるものではない。現実のいじめ被害者の誰もが「弱い男の子は強い男の子が好き」なわけでもなければ、「強い男の子」と友情を取り結ぶことができるわけでもない。にも拘らず「いじめ」問題一般について「弱い男の子は強い男の子が好き」なもののだと発言してしまうならば、その語りは「ぼく」の認識を外れる状況に置かれた被害者の存在を排除する言説となってしまう。「ぼく」の体験は個別的であるからこそ尊重されるべきものであるが、個別的であるからこそ一般化により暴力的な言説へと転化してしまうものでもある。ここに示されているのは、かつて「いじめ」被害者の立場に置かれ、「いじめ」被害者としての当事者意識を強く刻み込まれた者自身が、いつのまにか当の「いじめ」被害者を抑圧する言説を再生産してしまっている事態なのである。

「ぼく」のこうした発言が見逃せないのは、「ぼく」が作中、病気の妹に対しては次に示すような態度を一貫させているからである。

友だちが死んでしまうというのは、そして死んでしまうかもし

れない友だちと出会い、付き合うというのは、どんな気分なのだろう。マンガやテレビで観て、だいたいこんな感じだろうと思っ
ていても、ぼくが「わかる」と言っ
ては申し訳ないような気がする。(二四三頁)

別の箇所でも、妹がわがままを言い募らないことに対し「理由を「これだ」と決めつけるのは、病気でない人間の傲慢さのあらわれのような気もする」(二二三頁)と述べているように、「ぼく」は、妹の病いの体験については「申し訳ない」「傲慢さ」といった言葉を用いつつ何かの解釈を施すこと自体にきわめて慎重な姿勢を見せている。他者の経験に対し、「ぼく」は一方では「わかる」と言っ
ては申し訳ない」と述べ、他方では「それぐらいわかんのかアホ」と毒づく、まったく正反対の態度を取っているのだ。「ぼく」による「へいじめ」報道への発言には、妹への向き合い方を鑑みるならば
当人にとっても受け入れ難いであろう暴力性が混入してしまっている
のである。

そのことを踏まえ、改めて「ぼく」による小学生当時の回想を
読んでみると、「ぼく」が当時の「へいじめ」体験について周囲の人々への悪意をことさら抑制して語ろうとしている側面が見えてくる。たとえ
ば次の引用箇所では、周囲の人々への好意を直接的に表明する一方、ある種の
わだかまりを示してもいるのだ。

その日を境に、ぼくはエビスくん以外のクラスの男子の誰か

らも口をきいてもらえなくなった。

それでも、ぼくは浜ちゃんが好きだった。エビスくんが好き
だった。吉田さんも好きだし、生活指導には厳しくせになにも
も気づいていない藤田先生のことも好きだった。最初は浜ちゃんに
脅されてしかたなく、やがて面白がってぼくを無視するようになった
キーやんや菊ちゃんたちもみんな、好きだった。

(二四三頁)

「ぼく」は藤田先生の「生活指導には厳しくせになにも気づいていない」
一面にも思い至っているのであり、同級生のキーやんや菊ちゃん
が「面白がって」自分を無視するようになったことにも気づいてい
る。そして、彼らのそうした振舞いを「ぼく」が少なからず不満に思
っていたことも推測できるのだが、「ぼく」はその不満を押し隠し、最
初から負の感情など存在しなかったかのように語るうとするのである。

以上の点から、「ぼく」の語りには、小学生当時の「へいじめ」
体験を現在の視点から再構築するにあたり、その体験を実際以上に美
化しようとしている歪みが見出される。では、「ぼく」の語り
に存在するそうした歪みはいかなる必然性によってもたらされたもので
あるのか。次節から、「ぼく」の主観に影響を与えた環境要因・社会
要因の存在に目を向けて考えていきたい。そのために着目したいの
が「おちんちん」である。

三. 男性性の問題

前節では、「ぼく」の語りにかつての〈へいじめ〉体験を好意的に再解釈しようとする歪みが見出せることを示した。本節では、そのような歪みの生じる背景について、エビスくんのほか学校や家庭にて「ぼく」が身を置いていた種々の関係性に即して考えていきたい。

先にも引用した、大人になった「ぼく」による〈へいじめ〉報道への発言を改めて見てみよう。「ぼく」の認識〈弱い男の子は強い男の子が好きなんや〉を、前節では現実の〈へいじめ〉被害者への抑圧的な言説であると把握したが、この語りには他にも重要な論点が含まれている。それは、「ぼく」が〈へいじめ〉問題一般を「男らしさ」

＝男性性の問題として捉えているということである。

本作における男性性の問題に関して、本文中に〈おちんちん〉という言葉が多く登場し、重要な役割を果たしていることを確認しておきたい。たとえば次に引用するのは、互いに友情を確認し合う以前に「ぼく」がエビスくんから〈へいじめ〉を受ける場面である。

「早くちんぽ出せよ、しょんべん行きたいんだろ？ 早くしねえと漏らしちゃうだろ？」（中略）

ジッパーをおろし、パンツのなかに指を入れて、縮こまっていたおちんちんをひっぱりだした。噴水の小便小僧のように腰を前に突き出して、親指と人差し指と中指でつまんだおちんちん

んを振った。泣いてしまおうかと思ったが、勝手に頬がゆるみ、へらへらと笑った。教室が静まり返る。ほんとうに話声が消えたのかどうかはわからないが、記憶のなかでは、ここから先の光景に音はない。（二二八頁）

引用箇所は「ぼく」自身〈へいじめ〉出そうとしても、それが九月の何日だったか、どうしても日付が出てこない。ひとつの場面、忘れてしまいたいくらい嫌な光景だけ残して、あとはすべて記憶から抜け落ちている（二二六頁）と回顧する、本作において最も生々しい場面である。この場面で〈おちんちん〉の様態が〈縮こまっていた〉〈小便小僧のよう〉と描写されていることに着目したい。エビスくんから苛烈な暴力を受け、その被害がクラス中に晒される惨めさの表象として、〈おちんちん〉はこのように描き込まれているのだ。

対して、エビスくんと友情を結び、クラスにも再び馴染むことができた「ぼく」の〈おちんちん〉は次のように回想されている。

おしっここの勢いが弱まりかけると、おちんちんを支えていた指を離し、陰毛を軽くひっぱってみた。おちんちんのまわりに毛が生えてきたのは、小学校の卒業間際だった。父に連れられて阪大病院にゆうこを見舞いに行ったから、たぶん日曜日だったはずだ。（二八九頁）

エビスくんとの交流を経て「ぼく」の〈おちんちん〉のまわりに毛

が生えてきた」ことが思い出されている。すなわち、「ぼく」の認識においてエビスくんと関わった時間の流れは男性としての成熟と同期しているのである。また、「ぼく」とエビスくんの友情の結実にもまた「連れしよん」の形で「おちんちん」の協力があつた(二七〇頁)。「ぼく」とエビスくんは、「男らしさ」を互いに認め合うことを通して親友と確かめたのである。こうした点から、エビスくんととの友情を結ぶことには、「ぼく」として「男らしさ」の面で未熟であつた過去の自分と決別し「真の男らしさ」を獲得する意味があつたことを推測できる。そして、ここから検討していくように、このような男性性への認識は、学校、家庭の双方にて象られ、補強されていったものと見ることができる¹⁰。

「ぼく」の通う学校では、教員すら「男は、あんまり頭べこべこ下げるもんやない」(二〇二頁)と無邪気に口にしてしまうほど男女のジェンダー差が強固に腑分けされていた。そのような学校の人間関係の中で、「ぼく」は独自のジェンダー規範を無意識に身につけていく。中でも浜ちゃんが「ぼく」に与えた影響は大きい。浜ちゃんは「ぼく」が「へいじめ」被害者の立場に甘んじる状況に苛立っており、「ぼく」に対し次の場面に象徴されるような態度を取り続けていく。

「ひろし！ 殴れ！ かめへん、わいがすぐに行つたる、思ひっきりどつきまわしたれ！」(中略)

ぼくは首を思いきり強く横に振つた。首がちぎれてもいい。どうなつてもいい。こんなのは、もう嫌だ。エビスくんからも浜ちゃんからも殴られてもかまわなない。そのかわり、どっちも殴りたくない。ぼくはエビスくんが好きだ。浜ちゃんが好きだ。みんな好きだ。強いひとのことは、みんな好きだ。僕はなぜこんなに弱いのだろう。ふと見たら、浜ちゃんまで泣き出しそうな顔をしていた。それがたまらなく嬉しく、同じぐらい悲しかった。(二三八—二九九頁)

浜ちゃんは、「ぼく」に向けて暴力を振るうエビスくん以上、エビスくんを殴り返さない「ぼく」に対し苛立ちを募らせていくのである。その苛立ちは浜ちゃんのみならず同級生の多くに共有されていたようで、「ぼく」は彼らに対し「ヘクラスのみんなは、誰も助けてくれない。「ひろしも気イ優しすぎるん連うか。おまえが辛抱するさかい、エビスもいじめてくるんや」と何人もの友だちから言われた。まるで、こっちが悪いことをして叱られているみたいだ」(二二二頁)との不満も吐露している。しかし、そのような不満が「ぼく」の語りにも前景化することはやはりなく、「僕はなぜこんなに弱いのだろう」と、周囲の人々がつ「強さ」に対する「弱さ」へのコンプレックスとして意識されていくのである。

こうして学校内の人間関係を身を浸すことにより、「ぼく」の内面には「強さ」が望ましい男性性として定位されていく。〈だって、

エビスくん強いんやもん、強いひとは引き算してもええねん、わがままでも乱暴者でもええねん、阪神の江夏さんやプロレスのデストロイヤーかてそうやろ。ぼく、男の子やさかい、強いひとのこと好きやねん(二三四―二三五頁)と臆面もなく語る「ぼく」にとつて、男性性とは「強さ」に結びつくものとして専ら魅力的にのみ映っている。そして、そのような「ぼく」のあり方は、周囲の女子児童からも承認を受けていくのである¹¹⁾。

男性としての成熟を希求する「ぼく」のあり方に更なる承認を与えたのが家庭である。「ぼく」が妹を大切に思う気持ちの根本には、幼少期に両親から掛けられた(ひろしはお兄ちゃんなんやさかい、辛抱したってえな。お願いやから、もっとええ子になって。あんたが悪い子でおったら、ゆうこの病気、いつまでたっても良うならんやないの。ほんま、ゆうこ、死んでまうで。それでもええんか? あんた、それでもお兄ちゃんか?) (二〇九頁)との言葉があった。その言葉を受けて芽生えた妹への責任感を「ぼく」は次のように語っている。

その日を境に、ぼくも変わった。わがままを言わなくなり、友だちと喧嘩しなくなった。いたずらをやめ、両親に甘えるのをやめた。いい子になろう。ゆうこのために一所懸命いい子になろう、と決めた。我慢や忍耐とは少し違う。いい子になることが、ぼくの夢になり、目標になった。カードにスタンプを捺

していくように、ひとついい子になれば、ひとつ神さまに褒められ、ひとつゆうこが元気になるのだ。(二二〇頁)

ここからは、妹に対して責任感をもち「いい子になる」ことが「ぼく」の内に半ば強迫のような至上命題として君臨していたことを見て取れよう。実際、エビスくんをお見舞いに連れてくることを妹に約束してしまった後、「ぼく」は(絶交するわけにはいかない。ぼくたちはずっと、親友のままではないかならぬ)(二二三頁)との思いを抱き、妹を落胆させたり、そのことによって両親を困らせたりすることを周到に避けるようになる。そして、このような妹への責任感もまた、妹の容態が急変した際に父親から(ひろし、男の約束でけるか)(二四九頁)との言葉とともに手術の計画を明かされるやりとりを経て、「ぼく」の中ではやはり男性性の問題へと結びつけられていくのである。

以上のことから考えるに、(へいじめ)体験を含み込み「男らしさ」を確認し合うことで成立するエビスくんとの友情は、「ぼく」にとつて、学校にて育まれた望ましい自己像(男性像)へと自身を近づけていくことや、家庭にて植え付けられた兄としての責任感を過剰なまでに全うしようとする強迫に応えることを可能にする「成果」の側面があった。前節にて見たような、「ぼく」がかつての(へいじめ)体験をことさら好意的に語ろうとするこの必然性は、何よりもこの点に求められよう。「ぼく」は、男性性の成熟を人生の成果とし

てアイデンティティに取り込んでいったために、かつて被害経験の中で周囲の人々に抱いた不満を不可視化し、へ弱い男の子は強い男の子が好きなんや」の発言に象徴されるような当事者意識を身につけていくこととなったのである¹²。「へいじめ」体験と承認された男性性が結託することにより生成されたこのようなあり方こそが、「へいじめ」体験における「ぼく」の当事者性であると言えるだろう。

最終的に本作は、かつての同級生たちと再会し、病気だった妹が結婚する大団円を迎える。しかしながら、本節に見てきたような解積を経た後、本作が一面に提示している「ハッピーエンド」を手放しで受け取ることははや不可能であろう。では、ここまでの読解を踏まえ、本作はいかに読み替えられることとなるのか。最後に、次節にてその読みを提示したい。

四．エビスくんへの抑圧

「ぼく」がエビスくん「強い男の子」としての憧れを抱いていることはここまでに見てきた通りである。しかし、その憧れは時としてあまりに過剰なものとなっている。もっとも顕著なのは次に引用する箇所であろう。同級生たちとの口論のち学校を飛び出してしまふ「ぼく」はその道中でエビスくん「会い、喧嘩の後、病気の妹がエビスくん「会い、目を動かさ

ずに言った。

「妹が、あそこにおんねん。赤ん坊の頃からなんべんもなんべんも入院して、いまも入院してるんや。あそこ、半分ぼくの家やねん。お母ちゃんも、お父ちゃんも、ずうーとあそこにてはんねん」

「なんだよ、それ。妹、病気なのかよ」

「なあエビスくん、きみのご先祖さん、エベッさん違う？」言葉が、軽く、ふわっと唇から離れて宙に浮いた。「きみ、エベッさんの子孫と違う？ ご先祖さん、神さまやったんと違う？家のひとにそういうの聞いたことない？」

「あるわけねえだろバカ。それより、おまえの妹どこが悪いんだよ」

「エビスくんとぼく、親友なんやろ」

「そんなの関係ねえだろ。おれが訊いてんだよ、ちゃんと教えてよ」

「親友やろ？ ぼくら」

「生まれつき具合悪いのか？ ケガなのか？ 病気か？」

「ぼくら親友やな！ ぜったいに親友やな！ ええな！」

(二六三頁)

引用箇所を改めて読んでみると、「ぼく」とエビスくんの会話がほとんど噛み合っていないことに気づかされる。「ぼく」の妹が病

気である」と知ったエビスくんはその事情を詳しく聞こうとするのだが、「ぼく」は自分の理想を一方的に言い募るばかりで全く耳を傾けようとしなない。ここでエビスくんが「ぼく」の妹の病気を知った途端に興味を強くする背景に、エビスくん自身にまつわる理由があったのだと想像することも——たとえば、エビスくんの身近にも病気の人物がいたのでは、と想像することも——あるいは可能であろう。しかし、「ぼく」がその可能性に思い至ることはなく、自分の話をまくし立てるだけで終わってしまう。「ぼく」とエビスくんの友情は結果的に成立するのだが、こと「ぼく」の態度に目を向けてみると、エビスくんのバックグラウンドを十分に直視できていたのか疑問が残るのである。

問題は「ぼく」とエビスくんの二者に留まるものではない。「ぼく」の語りにも前景化することはないが、エビスくんもまた集団的な排除の対象となっていた可能性は、次のような言及から推測できる。

エビスくんは自己紹介をまったくしなかったが、狭い町だ、噂話はいくつか流れてきた。母子家庭だという。母親と二人きりでの町にきた。父親はやくざだったらしい。ちんぴらに射殺されたという説があり、事件を起こして刑務所に入っているという話もあり、また、香港だか台湾だかに高跳びしているのだと話す友だちもいた。「ちょっとひろし、ほんまのところをいっぺん訊いてみたらや」と菊ちゃんたちは勝手なことを言う

が、いずれにしても、やくざの息子ということで、エビスくんは正面きって文句をつける友だちは一人もいない。

(二二二—二二三頁)

引用箇所からは、「ぼく」の住む「狭い町」においてエビスくんの一家が腫物を触るように排除の対象となっていたことが読み取れる。そのように考えるならば、「ぼく」以外には誰もエビスくんと意味のある関係性を築こうとしない状況は、「狭い町」における特定の人物への抑圧が教室空間に再生産されたものであるとすら見ることが可能であろう。「ぼく」が不可視化しているのは、エビスくんの置かれたこうした抑圧的な環境でもある。エビスくんへの一見、好意的な眼差しによって、「ぼく」はエビスくんの身に起きた被害を「いじめ」の言葉によって問題化する契機そのものを失っているのではないが。「ぼく」は、自身の「いじめ」体験を好意的に語り直す過程にて、他者の「いじめ」体験をも問題化の機会すら与えないままに不可視化してしまっているのである。したがって「ぼく」の語りは、エビスくんに対する視線の限界を自ら露呈させている。語り手「ぼく」によって懐古的に語られる出会いが、実は決定的な「出会い損ね」でもあった可能性が本作では暗に物語られているのである。

しかし、それでもやはり、そうした錯視を「ぼく」個人の落ち度として非難することもまた躊躇われてしまう。それは、「ぼく」がエビスくんから確かに「いじめ」を受けていたからである。「いじめ」

の被害者たる人物に、仮にも加害者である人物のバックグラウンド、まで正確に把握せよと要求するのは、あまりに酷いものである。述べたような「出会い損ね」は、このようにして出会ってしまつた二人にとっては必然であつたとも考えられるのだ。

ともあれ確かなのは、単純な加害／被害構造の先にある「へいじめ」の複雑性への思考実験として、本作がきわめて重要なものであるということだ。本作は一面で、未熟な存在であつた「へいじめ」被害者が、加害者と友情を取り結ぶことにより成長し、「へいじめ」を「克服」していく物語として読める。しかし、その物語の背後には、ある関係性においては加害者である人物が別の文脈においては被害者であつたのかもしれないということ、被害者が自身の「へいじめ」体験を美化することにより他者の被害性をも不可視化してしまう場合があるということ、にも拘らず、そのようにして種々の経験が不可視化されることの責任を特定の個人に求めるのもきわめて難しいということなど、「へいじめ」問題に生じ得る数々の複雑性が進行しているのである。

本作は、「男性性への眼差しが「へいじめ」への当事者意識と交錯したとき、その当事者性において顕在化する暴力性を、物語に埋没させてしまうことなく、かといって存在自体を消し去ってしまうことなく、危うい問題提起として浮かび上がらせたテキストである。本作が読み返されていく意義は、そのような点にあると言えよう。

おわりに

以上、「へいじめ」の観点から重松清「エビスくん」を読んできた。第一節および第二節では、「ぼく」の語りに存する歪みを明らかにし、その語りを相対化する読解の必要性を提起した。第三節では、「ぼく」の意識下にある男性性の問題に着目し、物語構造の分析を行なつた。第四節では、「ぼく」からエビスくんへの眼差しをより詳細に読解することで、単純な加害／被害構造に収まらない「へいじめ」の複雑性への表現として本作を評価するに至つた。

「はじめに」にて示した通り、重松清は家族の問題、少年少女期の問題等を作品テーマとして継続的に扱っており、「へいじめ」問題を直接的に取り上げた本作には重松の資質が鋭利に表れている。本作に対し「へいじめ」および男性性の問題に着目して分析評価を試みた本稿は、重松清研究に対しひとつの重要な観点をもたらすことができたと言えよう¹³。また、「男性性への眼差しが「へいじめ」の当事者意識と交錯する語りのあり方をその暴力性や危険性も含めて分析した点で、「へいじめ」の特徴的な語り方の存在を明らかにすることについてもひとつの成果を示し得たはずである。

本作は、文学における「へいじめ」表象への示唆を多く含んでいる。本作の示す加害と被害の錯綜に、読者である私たちもまた不安定な立場に置かれざるを得ない。そのようにして私たちの当事者性もま

た、本作を前に試されているのである。

註

- 1 重要な論考は多々あるが、伊藤茂樹『子ども自殺』の社会学「いじめ自殺」はどう語られてきたのか(青土社、二〇一四年九月)は当該分野のひとつの成果といえる。伊藤は同書にて、いじめを極度に単純化しセンセーショナルな「ネタ」として消費する言説を「ドミナント・ストーリー」と呼び、複雑性を担保したまま語り続けていくよう試行錯誤すること、「オルタナティブ・ストーリー」を開発していくことの重要性をこの問題の従来の方や語られ方から生じている弊害を減らし、解消していくために必要なのは、いじめや「いじめ自殺」について未だ目の目を見えない別の語り方を発見し、それを広めていくことである(一六五―一六六頁)と提言している。
- 2 『ナイフ』は二〇〇〇年七月に新潮社より文庫化されている。本稿は新潮文庫版『ナイフ』を底本としており、引用文中の傍線、中略、註はすべて筆者が施したものである。『ナイフ』より本文引用をする場合には、引用文の末尾に括弧書きで頁数を示した。
- 3 『ナイフ』の収録作である「ワニとハブとひょうたん池で」への分析には、重松恵子「重松清「ワニとハブとひょうたん池で」論「孤高のハブ」という選択」(『福岡医療福祉大学紀要』九号、二〇一二年)がある。
- 4 伊藤氏貴「善き「いじめ文学」のための一章 いじめ空間という地獄」(『現代思想』第四〇巻第一六号緊急復刊raging いじめ学校・社会・日本)青土社、二〇一二年一月)にて、〈ナイフ〉のなかの一編『エビスくん』でも、いじめられる側は「毎日毎日、地獄やで」と言いつつ、いじめっ子のエビスくんを忌避することができない。クラスメートはそれを不思議に思う。エビスくんは「親友」ということばで相手をがんじがらめに

しようとするが、被害者も逃げようと思えば逃げられるのに、その特殊な関係に埋没してしまう。一種のストックホルム症候群と、その逆のリマ症候群とがここに生じている。加害者／被害者の間の精神的癒着が生じるのだ」(一六五頁)と言及されている。

- 5 香山リカ『いじめ』や「差別」をなくすためにできること(一三二頁)ちくまプリマー新書、二〇一七年八月)
- 6 註5に同じ、一三四―一三五頁。
- 7 滝元「いじめ」行為の発生要因に関する実証的研究——質問紙法による追跡調査データを用いた諸仮説の整理と検証——(『教育社会学研究』第五〇集三七二頁、一九九二年八月)
- 8 註7に同じ。
- 9 教育学者の尾木直樹は、(これまで)に起きた事例でも、被害生徒の多くは、加害者の報復を恐れて他人には相談しない傾向がありますし、教師などの聞き取りなどに対しても「いじめられていない」「だいたいぶ」などと否定する場合があります。実際に、いじめの被害を受けている時でも、笑みを浮かべて耐えている場合も珍しくありません。そうすることで、「大したことない」と自らに言い聞かせ、かろうじて自分のプライドを守るしかすべがないのです」と述べている(『いじめ問題をどう克服するか』一七頁、岩波新書、二〇一三年一月)。『いじめ』被害者自身が自らの被害経験を否認している場合は多々あり、その被害性を十分に尊重するためにこそ、被害者の語りを相対化するアプローチは必須といえる。ただし、被害者の語りを過剰に相対化し、被害性そのものを否定してしまうことには注意が必要である。この点については、口頭発表「(いじめ)との距離——村上春樹「沈黙」論——」(日本文学協会第四〇回研究発表大会、二〇一二年七月四日、zoom オンライン発表)にて問題化した。

10 ほか、自分のパンチがエビスくんに命中する様を「手ごたえが、あった。体育のマットのような堅さ。拳がはじかれる」と感じた直後、意外なほどあっけなく拳はマットにめり込んでいった。目を開ける。エビスくんの顎と喉の境目に、ぼくの拳がある。アッパーカット。『あしたのジョー』

で力石徹が矢吹丈をノックアウトした、あの必殺パンチが決まったのだ。(二五七頁)と語っていることからは、「ぼく」の男性性への認識に同時代の時事風俗も影響を与えていたことを見て取れる。

11 クラスの女子児童がエビスくんによる「へいじめ」を先生に相談するよう勧めたとき、「ぼく」はそれを拒絶する。のちに女子児童たちは「ぼく」に「ごめんね、相原くん。うちら考えなしのこと言うてもうて……堪忍して」へおまえらよけいなことするなって、めっちゃくちゃ怒らあったん、あのひと。(二七五頁)と言葉を掛けるが、これは「ぼく」とエビスくんの「男同士の友情」を尊重し、そこに「女子」の立場からは口出ししないことを美德とする価値観の表出として読むことができよう。

12 「ぼく」の「へいじめ」体験の舞台である一九七〇年代は、高度経済成長期に完成した「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業が強く浸透し、日々の生活を頑丈に乗り切っていく資質が男性には希求されていた。男性性研究を専門とする田中俊之は、この点について「高度経済成長期の日本では、働く人びとの多くが雇用者化され「職業」という輪郭」が明確になり、また同時に、終身雇用と年功序列といったいわゆる「日本的雇用慣行」が一つの価値として形成されていく。(中略)そして、男性正社員には仕事中心的な生き方を強要する「生活態度としての能力」が求められ、女は調整的な仕事に従事する安価な労働力とみなされることになる(『男性性の新展開』九九頁、青弓社、二〇〇九年二月)と整理している。当時の状況を一九九〇年代から語り直す本作は、このようにして「生活態度としての能力」すなわち「タフさ」が男性に求められていた価値観

の綻びを「へいじめ」に即して問題化したものとしても読むことができるだろう。

13 重松は本作以降、『ピタミンF』(二〇〇〇年)や『流星ワゴン』(二〇〇二年)などで「父と息子」の主題を繰り返し問題化していく。その創作の初期に男性性への示唆を含む本作のような作品を書いていたことは記憶されておいてよいだろう。

付記：本稿は、二〇一九年度広島大学国語国文学会研究集会(二〇一九年七月一三日、於・広島大学)での口頭発表に基づいている。発表に際して多くのご教示を賜った方々に感謝を申し上げます。

―はた・こうへい、広島大学大学院人間社会科学科博士課程後期在学―